

針葉樹会報

1955

又戦后的張り切り者田中から資料を得ねばならないの
だが、不幸にも前者は療養生活、後者は在郷育て共に
連絡がとれない。為に筆者の経験が中心になるが、此
の点予め御許しを得て置く。

一、昭和十七年

太平洋戦争開戦後四ヶ月、緒戦の戦果に良い気持になつている頃、吾々は戦争のお蔭で競争率の減った予科へ入学し得た。そして入部。

「ある時代」
石井左右平

私は全くどんづらなし時代に山岳部の生活を過した。

開戦の翌る春から戦後インフレ高涨期まで、世に云う暗い冬の時代である。然しそうあろうと、私は良き先輩、良き同僚、良き後輩を得て、一生の思い出となる山の生活を送り得た。

此の間の山岳部に就き、まとまつた記録を残して置き度い、とは吾々同僚の前々からの氣持であつたが、卒業後のゴタクで未だに異せない。何れチャンスを得て必ず針葉樹十号に続く時代の記録をまとめる所存であるが、不取敢会報の一部を借りて概括的に記して置く事とした。

概括と云つても本来は、戦時中の中心だった中村讀治當時の学三が、山田、根本、久保、森、樺洞、小泉佐藤、川村、林、学二が居なくて学一が、小林、松下、高野、林戸、原田、大野、鈴木、浜口、予科三が間々田、伯耆、中林、専三が細野、予科二が樋口、専ニが大崎の諸先輩、五月になつて予科二の眞木、更に遅れて野尾さんが入部、之に吾々、即ち、讀治、大河原、倉田、関、岩崎、石井が入り、四月の半ば頃国立の部室でさゝやかな歓迎会を催して頂いた。そのあと暫くしてから、予科の部室に見た様な顔の小さな男が入部し度いと入つて来た。何と、予科入學式で以上総代をやつた男である。どうも学校の成績の良いのには余り縁のない吾々で、一寸驚いたが、間もなくこの矣、でも吾々の同僚、ごある事を立証して呉れた、之が山崎、處で当時の部は前年十月に秩父のアクシデントがあり、又それ迄小谷部、森川、大塚の諸先輩による云わば華の時代を過して来られた学三の方々の卒業を僅か半歳に控え、

針葉樹会報

復刊第三号

慎重にという事がモットーにされていた様に思う。又、社会の情勢も次第に派手な山行を許さなくなる様になり、事実、開戦直後の十二月には國立から富士近という計画がなされ、春の合宿もまとまつた事は行われなかつた、と記憶する。而も、こういう事は大分あとになつて氣の付いた様なこと、當時の吾々には、その様な云わば暗い面には極力触れさせず、樂しい節生活を送る様、諸先輩は気をつかつて呉れていた様子で、此の点、未だに感謝している次第です。

そこで、入部早々、讀治が確か伯耆やんだったかと丹沢へ行つた。此の日に初の東京空襲があつたが、あと三年后に東京があんな事になるとは思いも及ばず、空襲に対してもヒヤカシ半分であつた。

その後続いて、三ツ峠で新入部員歓迎の岩登り、讀治を除く全部が初めてサイルなるものを知つた。

続いて後立山の合宿が計画され、予科一は全員参加、

五月早々に新宿を発つた。初めての特大リュック、ピッケル、アイゼンで一人前の部員になつた様な気がして、全く嬉しかつた。此の合宿は中堅部員の養成が主眼であつた、と記憶している。

ヤナ場から鹿島川へ、雪どけの渡渉のつらかつた事。その晩、先発していた小林さん達が、確か東尾根へ行って、吾々の到着の頃には帰つて来ている筈だつたが、

誰も居らず、山田さん達が可成り心配して迎えに出たりしたが、兎も角遅くなつて全員顔を合せ得た。

翌日は鹿島の頂上迄全員で、隔りに、グリセードの練習など、夜はコンパ。此の夜、既に当珍しかつたトリコロールの洋菓子を、銀座に住んでいた私が持つて行き、店に大変喜ばれた。樂しい思い出である。

翌日から二班に分れて縦走。山田さん達に連れられて大河原達が谷方面へ。確か雪洞の勉強などした筈。私は讀治山崎と共に根本、小林、高野、原田氏に連れられて、五竜から白馬へ、ハ峰キレット、唐松小舎に夫々一泊。頼りないキレット小舎、上から見た力クネ、唐松小舎の鐘など最初の山行だけに忘れられない印象である。吾々はどうやら元気に歩いていたが、高野さんが腹が不調でチヤーコール的な薬を飲みつゝ苦辛。黒い物を出しつゝ苦しんでいたが、唐松から原田氏につきそわれて下山して行つた。

西氏に別れて不帰へ。不帰の途中で讀治がどうした事が、二度もスリップ。下の方で雪眼鏡を口にくわえて立ち上つたのには大笑い。

此の話未だに嫌がられる。白馬に着いた頃には全くへばつてつた、と記憶している。

いたが、雪をかきわけてザイルまで使つて入つた小舎で、布団田をたつぶり使い、又、今迄報いも知らず、根本さんが持つて来たサントリリーに全く感激。物の効果の現わし方を知つた。後年卒業後毛無へ行つた時大塚さんのビスケットで、又

成程と思つた事がある。

笠朝頂上で握手して下山。大雪渓を先輩の世話を受け
下り、滑りつまろびつ、それでもどうやら白馬尻へ。そ

れから四ツ谷迄の道が大変。ホーム・スピードなんか根本さんとのストライドの大きいのには全く泣かされた。特に山崎は、坐高が高いので、根本さんや講治の一步は彼の

二歩に相当する為、大変な苦労。

その夜は松本で、名を度忘れたが、あの牛問屋、ハ
竹、国民食堂など教えられ、小林さんの大食に驚かされ
た。又、帰りの車中、この根本氏の営林署役人歟とした姿
小林さんがやあらズボンをぬいで、つくりを始めた事
など、未だに忘れずにする。

兎も角、吾々一年生は此の合宿で、完全に山め、そして山岳部のとりこになってしまった。吾々にとつて一生
忘れられない貴重な合宿である。長々と書いたのはその
為、悪しからず。

尚、以上、又今后も、手許に何一つ資料無く、記憶に
頼るだけなので、或いは諸先輩に失礼な間違いなどを冒
すかも知れません。此の点、何卒御容赦の程、予め御願い
致し置きます。(赤完)

(五五・二・二七)

ハモニカ横町から前田まで

山田亮三

1

北海道から林正敏がときどきでてくる。それを機会に仲間が集るのが近頃の慣例だが、先日は皆、ま頬の御多忙とかで、会する者わずかに林、大塚、山田の三人。新宿はハモニカ横町、ロマンス小路あたりをさまよつて一夕の散をつくした。日頃法皇院に勤務して、森巣せ重な空氣になれた大塚日銀氏など、ハモニカ横町を曲ったとたん、「汚ねえところだなア」と発言あそばし、案内役の小生をクサらせたが、飲むほどに酔うほどにキエンは上り、ナンガ・パルバットのヘルマン・ブルーの单独行は美事な業績だが、どうもあの遠征には気色の悪いところがあるのだ。一昨年の日本のマナスルで、あの時間あの地点で引返したのは、だらしがないなど、山の廃兵のくせにいつぱしの口をきいたものだ。もつともこのマナスル問題は大塚現役氏(彼はこの夏本曾駒から空木へ縦走し、スキ)にもチヨクチヨクでかけるようだ。廢兵になつた小生からみれば、まだまだ現役である)も同感とみえ、少くとも小谷部全助さんならあの時登頂に成功していたろうと意見が一

針葉樹会報

号三第刊復

致、ひとしきり助さんとの思い出話の花が咲いた。そういうえば助さんと最後に冬の山で逢つたのは何時だつたろうか。古い山日記をひらいてみると、昭和十六年の正月、乗轎今宿の帰り、大塚、林が上高地から前穂へ、小生、佐野、前田の三人が一の俣から小槍へ行つたあの時、助さんたちも穂高に入つていた筈だ。村尾、堀岡両先輩もたしか一緒にいたと思ふ。小槍に失敗して徳沢に下つて一緒にになり、翌日南岳に行くという諸先輩の驥尾に附して、では北穂の北壁、でも登ろうかとかけたものの、途中でイヤ気がさして廻れ右。友田の遭難の年で、万事慎重がモットーだつたとしても頗る張切らぬ冬山だつた。「現役のくせにダラシがない」と助さんに叱られたことを覚えてゐる。

2

その時のパーティの一人だった前田が秩父で遭難したのが同年の秋のこと、彼等が出発する前の日の部室で、「帰つてきたら穂高に行きましょう」

「ああ、北尾根に登ろうね」

と約束して別れて、それつきりになつた。

一橋山岳部員としての前田の経歴は一年半の短いものでしかない。当時の部の事情も、前田にとつては氣の毒なものであつた。入部した年の夏の合宿が友田の遭難、翌年の夏が記念碑の建設で、入部二年、前田はまだ北尾根

や飛騨尾根など、穂高の入門的岩場を歩いていない。しかもその前年の秋には、私が鹿島槍から廻るからと約束しながら、彼をひとりで徳沢にまちぼうけさせたこともある。その罪むほしに穂高を案内しようというのが前記の約束になつたわけだが、こんどは前田が永遠に還らず、十数年の歳月をへだててなお私の胸に痛恨の種を残すことになつた。

だがその短い前田とのつきあいの中で、今思い出しても気持ちの良い山登りが一つある。

あれは前田が遭難した年の春、正確にいうと昭和十六年五月十五日から一週間ほど。森、前田、山田の三人で、西穂から槍への縦走を試みたことがある。激しい気力にみちた登山よりもといふより、手なれた自分のホーム・グラウンドで、ノンビリ山を乗しあうというのがこの旅行の目的。初日上高地泊り、当時の山日記によると、「五月らしい如何にも気持の良い天気」とある。翌日西穂高沢方俣を登つて稜線にて、西穂のピーグを踏んだあと、雪洞を掘つてビザーク、シュラフも持たぬ軽装で、私と森が寒くて寝られないでいるのに、前田がひとりグワグワ気持ちよげに寝ていたことを思い出す。この日から天候崩れ岳は雪、下界は雨。やむなく上高地に下つて二日後槍沢小屋に入った。午前三時出發、殺生小屋ご夜明け、槍の頂上を踏み、穂高への縦走路にかかる頃は大快晴となつた。

ああ今でも忘れない。大喰岳の頂上から尻すべりで一気に

滑り下りてうしろを振りむくと、後続する二人の黒点が五日の中宮の下にポツカリとうかび上る。とみるまに素晴らしいスピードで雪の斜面をすべりはじめた。黒点が拳

大になり演物石になるなと思う間もなく、森と前田の笑
顔が私の側に立つてゐるのだ。

短い私の山登りの歴史の中でも、心にしみる思い出の数は必ずしも少ないと云えない。穂高滝谷、北岳、バットレス、荒沢奥壁など、それらの岩場の感触は、廢兵となつた現在ですら、私の血を湧かせる。しかしあの五日の大走路の一日ほど、何かシックリと山にとけこんだような、ホカホカと懐しい思いをだけ残す山登りの数は少ない。

その日は結局北穂まで行き、涸沢を下つて徳沢に泊つ

たが、はじめの計画が逆になり、肝心のジヤンダルムから北穂の間を歩かなかつたにかかわらず、その晩の私たちは心からの充実感に醉つた。

穂高は私のもつとも愛した山、その穂高を想うたびに浮び上るのはあの一日のくわいだいの光景であり、その行を共にした前田の面影である。

3

山と山仲間といふものは恐ろしい。山に才サラバして十数年、いいかげん浮世の塵にまみれた小生、ごやえ、山の二とを書くとなると、とかく筆が感傷的になり勝てあ

る。もつとも二の一文、他にためにする目的がないわけでは
ない。

あれは昨年の春だつたか、夏だつたか。これも林が北海道からでてきて、大塚、根本、佐藤、森、川村、久保、山田と珍しく顔が揃い、深川のドジョウで一杯のんだことがある。二次会、三次会と浅草辺を流れ歩いて、やいこは田原町あたりの旅館、ごザ、ゴ寝するという盛会だつた。翌朝目をさました川村が「オレは結婚してはじめてムダンで家を明けた」とシヨゲていたつて。へもつとも前夜、頬る張切つて、我々を宿屋に案内したのは川村である。閑話休題（

その盛会の席上、こういう話がでた。座談会形式でゆきま

し
よ
う

A 「山に行き、戦争に行き、結局、だれも死はないところをみると、俺たちのクラスはずい分ツラの皮が厚いぜ」

B 一但し、学生々活中遭難事件二度あり、嬉しいことはなかつたな」

C 「 そういえば友田の遭難記念碑、その後どうなつて いる
だろう」

D 「附近にベンチまでござて、五色ヶ原名物の一つになつ

ているそうだ

「お勞したおめでた、マジックセントの本業を離

二二九

F 「そこで思い出すのが前田だよ。友田は何とか記念碑も建てたが、前田のためには何もしていなかったろう」

G 「忘れてたな。どうだい、皆で今年の秋にでも笛吹川を遡つて、形だけでもいいや。何とかしてこようじゃないか」

A・B・C・D・E・F 「賛成 々々 是非やろう」

さて、座談会出席の皆さま、右速記録、まさか覚えがないとはいわれますまい。約束の秋は空しく過ぎ、今までお問題は具体化の段階にいたつていなし。まことに残念、今年の秋こそは何か懲業を実現したいというのが、前田にちなむこの一文を草した小生のひそかな願いである。癱兵とはいえ、時間さえあれば甲武信ぐらいは登れるだろう。木賊山三角点南方三メートルの密林の中、さきに倒れた長沼の身体にセーターを着せ、再び立上ろうとして倒れた若いけなげな友の面影をしりび、薄れゆく青春一とみの哀歎を追うのも、あながち時間のロスとは申せまいと思う。この点、右座談会出席の諸君はもとより当時、前田、古沢、長沼三君と親しく交わられた仲間の諸君にも、御同意、御参加をえたるものと考えていい。

(五五、二、三)

野沢温泉の記

増山清太郎

話は古いが、昨年二月に十一年振りで野沢を訪れた。例によつて例の通り、「さかや」の三階に通つたのだが、久振りに来たというのに、おばさんが挨拶に来ない。少々ムクれていたら、風呂に行く途中で帳場に呼び込まれて、近頃高血压で寝たる起きたりして、階段を登ることが出来ないとのこと、さても氣の毒な! 四方山話の末に「明日は山に行かれるのしよう、お弁当を作りましょう」と言い、しばらくしてポツツリと「よく毛無に行かれましたねえ」と付加えた。

しかしあはさんのは思惑は外れた。その日のうちに、「山」に出掛けたのである。そして、意外な現象を発見した。峠に行く谷間の道を登つて行くと、パラダイスの入口から先は全然シユプールが無いのである。時は二月末の土曜日の午後、ゲレンデは凍結盛して、すっかりパンパンツルツルになつてゐるのに、すっかり好い気分になつて、新雪をラツセルして峠に行き、淋しい越後の山を眺め、しばらく休んで、日暮に帰つて来た。

習日は、鉄索の尾根——こんな地名を書いても今は通用しない

い。ショナインダースロープといわなければならぬのだが、
か一を登つて樺の小屋まで行く。相当の吹雪になつた
ので上の平までは行かなかつた。ゲレンデでリフトに乗

その翌日また参った。昨日のシェブルが薄く

残つていて、その後人が来た氣配は更にない。スイスに廻つて、午すきに宿に帰つた。直路がいにしたて飯山へのバスが不通なので昔の通り上境から飯山線で帰る。国鉄になつた飯山線は私鉄時代よりも不整備で、一日に四回しか通らないから、豊野ご夜行に来るためには、三時に野沢を出なければならなかつた。

三日間の野沢滞在を感じたことを羅列してみると、私が初々、ここを訪れたのが昭和二年だから、入間が一世代廻つたのは已むを得ない。高血圧のおばさんはその頃はみすくしい丸髷に結つていたが、今はその頃の婆や人に生等しだ。異なるのは婆さんは手芸が上手だったが、

おばさんにはそれらしい臭いがしないだけ、主人もその頃の爺さんによく似ている。私達が学生の頃からあの夫婦はどちらが「やかや」の生れで、どちらが他家から入つた人なのか、よく議論の的になり、そして誰も確めないでいたのだった。トシ坊の子供も大分大きくなつてゐる。建物は玄関を入つて右側の簷屋根の部分を壊して大きな風呂場にした外は一向に変らない。新築、改築した

旅館が多いので、ややかやは二流旅館に宿した鏡は免れない。
シャンツエの上半が、模式になつてその側にリフトと小さな
いシャンツエが出来た。リフトで登り、またコースを滑
つて来る人達を山の上から見ていると、子供が公園の滑り台
で遊んでゐみたいだ。

山に出かける人の少くなつたことは前述の通り、その原因を考えるに、スキーヤーの殆んど全部が車運れだから、行動に制約が多くなつたこと、次にリフトの影響で下り専門のスキーイヤーが出来たからであろう。そう云えば、道具まですっかりゲレンデ向くなつてしまつた。ジュラルミンの杖、かいリング、カカトの無い靴、鉄金の締具等々。

三日間に野沢小唄が全然聞えなかつたのはサツパリして好かつた、私は昔平小唄は大嫌いだ。あんな唄は作者の生命と共に消えてしまつて差支ないものだ。

八五五、二二〇

四〇〇〇 米の焚火

中川孫

今日の山登りの器具は、あらゆる面に於いて進歩し、ヒマラヤ登山路の装備をみても、エベレストの場合、イギリス工業の粹を集めたものといわれてゐる。

従つて昔の登山では、焚火の技術の巧拙が、炊事は勿論、場合によつては、一命を支える重大な意味をもつていた。

マツチも新聞紙もズブ濡れになつて火が起こせず、凍死した話、地図や札まで燃して、ようやく助かつた話は、ザラにある。

今はガソリン、コンロが発達し、液体燃料が普及して、焚火技術などは、古典派の昔語りになつてしまつたと思ふだろう。ところが、ナンガ・パルバットに登つたドイツ隊が四〇〇〇メートルのベース・キャンプでも、焚火で炊事をしているのである。ヒマラヤ登山隊の装備は、科学の粋を集めているから、焚火のような原始的なことはやらないと、頭からきめていたのは、トンデモない短見であつた。と同時にトテも嬉しかつた。私は元来、焚火と木登りが大好きで、針葉樹会の席上、よく登山の基礎技術にこの二つは欠いてはならないと話したものである。今でも毎朝、コンロの大起しが焚火でやる。昔は私の独擅上だつたが、戰時中家内もカマドで散々体験を積んだので、私に劣らぬ名手になつた。

ガスの火起しにくべて次のような利点がある。

一、木が燃えているうちにコンロのフトコロが温まる。

二、オキができるから、すぐ炭に着火する。

三、コンロのフトコロが冷いから、折角熾つた炭は、マワ

リに熱を吸いとられて、なかなか熾こらない

ニ、その上オキがないから尚火が大きくならない

三、オキを作ろうと、火起しの中に粉炭を入れると、火格

子の目から洩つてしまふ

手間は、ガスの方がかかるないが、モノになると迄に時間がかかるから、結局焚火の方が早い。だから適当にヤニがあつて、着火しやすい材料を丹念に細く刻つて、湿らないようにフタのある箱の中に入れてある。焚火のヒケツは実は二、三うなところにある。これを、今の若い人達に伝授しよう。

昔、焚火の講演会があつた。というと古風だが、當世流に云えば、キャンプ・ファイヤーの作り方というお話である。

その中に、「雨中、枯葉三枚で焚火を作る法」というのがあつた。大した腕だと、耳を傾けた。

まず、松葉か細い木の枝をできるだけ多く集める、その上に刻箸位の枝を井桁に組む、其上に鉛筆位、其上に大筆の粗い枝と段々太い枝を重ね、点火材料として枯葉三、四枚を用意し、これを一番下に入れて、マツチを二、三本まとめてすつて一拳に大きな火を作つて点火するといつてある。細い材

料が、僅かな火で燃え上るのは当然だから、一旦着火すれば、あとは力ちなく山よろしく、忽ちボーボーと燃え上り、雨なんか問題にならないというのである。大分、名人芸でなかく「額面通りにはゆくまいが、細かい材料から点火して大に至る」という理論は、全くその通りである。着火の失敗は、イ

キナリ巨大な材料に、新聞がなんかで燃えつかそうとする
ことからおこる、そして、うちわで煽いだり、吠吹竹で吹

いたり、全く無用の腕立てである。

昔、ドイツの山岳映画に、アルプスの頂上近くの小屋で、
ストーブに点火する場面があつたが、登山者は、太いマキ
を削って、削り屑をたくさん作り、それに点火している。
焚火術のオーソドックスを示したわけである。

話を前に戻して、ヒマラヤ登山隊が、焚火をするのは二
つ（理田）が考えられる。

大部隊のキャラバンの炊事に液体燃料を使つたのでは、ベ
ース・キャンプから光の燃料を喰うことになるから、それ

の節約のため、

も一つは、大量の生の材料を調理するための大仕掛けの大
火は、どうしても木を燃やさねばならないこと。

こうやりながら、同時に基礎訓練を行つてゐる点は全く
敬服に堪えない。

テントの中とか、雪中とか、どうしても液体燃料による
あり、鉛が思う存分振え、鉛がゴシゴシ使え、キャンプ・
ファイヤーが三尺の火幅をあげた時の爽快な気分は、翌日
の夕キギ集めの苦労も忘れて、バリバリ燃したくなるのは、
私ばかりいやあるまい。

（五五、一、一一）

針葉樹会報

山岳部山行記録

一九五三年

四月 21-9日 遠見一五竜・唐松、石原、中村（Y）

25-26日 欽迎登山 日原・滝土谷

石原、鹿俣、八名

五月 21-24日 谷川春合宿、石原、渋谷、鹿俣、須山

白川、

甘利、南竹、吉田、栗屋、鈴木、松尾、春日井

棚沢、吉沢、石和田、宮川、南、山本、金沢

中村（T）、中村（Y）、西村、小森

平斐駒、黒戸尾根

中村（Y）、平井他一名

六月 21-15日 29-31日

ハケ岳縦走 告田・中村（T）、南

七月 15-131日

剣合宿、剣一五色ヶ原、スゴー上の岳、双六池

一上高地

石原、鹿俣、勝田、須山、白川、甘利、中村（Y）
吉田、佐藤、鈴木、春日井、栗屋、棚沢、石原

宮川、中村（Y）、大沢、南、山本、柴崎、金沢、

中村（T）

八月 1-12日 21-28日

ラウス岳 告勝

ヌタカルシユツペ 告勝

蝶一大滝、西穂、奥穂

霞沢三本槍、大百山

勝田、石原

柴崎

勝田、石原

針葉樹会報

号三第三回

27

1
30
30
25
日
日
日

五竜岳
愛鷹山縦走
白馬岳
石原

明神ー前穂ー奥穂

須山・白川

九月10-12日 木曾駒 中村(丁)他
十月3-4日 赤岳 春日井・南竹
3-12日 北岳ー間岳ー仙丈

吉田・平井・中村(丁)

30 1月 6日 穂高生活

甘利・吉田・佐羅・南竹(全員2年)

一九五四年 上高地ー涸沢小屋ー奥穂・ジャンダルム・涸沢
1月 潘沢ー上高地

3月 仙丈岳 中村(保)各務
戸台ー北沢小屋ー仙丈岳

十一月
一九五三年

28-12月 富士山冬期設営訓練

石原・甘利・吉田・松尾・南竹・石和田

山本・南・各務

五合目御中道に天幕二ヶ設営 29日登頂

其の他11月中 岩登り3.バー-ティ- 9名
十二月

16-27日 白馬梅池スキー合宿

石原・勝田(3) 甘利・佐羅・南竹・吉沢

宮川・瀬田(2) 南・柴崎(1)

梅池成城学園ヒュッテを借り、中丸五日

間の練習を行う。積雪やや少し

25日に解散、4名居残る

岩原・湯沢・五色・高尾山・丸池・草津・蓬嶺・苗場山
延べ14名

14-14月1日 春合宿

(3年)石原(1) 須山(会計) 白川(医療)

(2年)甘利・吉田・佐羅(アタツク)

松尾(器具)

(1年)山本・南

上高地より岳沢にベース・キャンプ設営
ジャンダルム・コブの頭間に雪洞(CI)
○ベースコブ屋根ーCIー奥穂ーCIー西穂

ベース

○ベースー畠岩尾根ーCIー奥穂ー前穂ー

ベース

其の他のスキー行

岩原・湯沢・五色・高尾山・丸池・草津・蓬嶺・苗場山

武東樹會報

4月

24-25日

歡迎山行 入笠山

石原・勝田(4) 吉田・吉利・松尾・佐藤

南竹・鈴木・宮川・尾身・佐藤・糊沢

石和田(3) 山本・南(R) 中村(T)

金沢(2) 西海・二階堂・朝木・長田・太田・南

麻下・宮川・岡垣・上原・高島・板谷

松澤・村上・茂木(1)

以上32名

28-15月3日 鹿島槍ヶ岳 甘利・吉田・南竹・佐藤

30-15月3日 五竜岳 山本・南・中村(T)・各務・柴崎

1-12日 丹沢東主脈縦走 小林・市畠

30-3日 三峠岩登 吉田・吉利

31日 谷川合宿

6月 石原・勝田・吉田・吉利・南竹・佐藤

南・山本・中村(T) 長田・二階堂・茂木

朝木・村上・宮川・小林

先般富士に於ける日大・東大・慶大山岳部の遭難に際し、

救援費用の一端にと会費より金千円也を寄附致しました故

御謹承下さい。

{ 報告 }

15日-18月4日 夏合宿

石原・勝田・須山・白川(4) 吉田

吉利・南竹・佐藤・松尾・石和田

吉沢 宮川(3) 山本・南・中村(T)

金沢(2) 上原・茂木・岡垣・小林

市畠・朝木・板谷・宮川・長田・大庭

以上 26名

先発(7名)

奥又白・バー・ティー(7名) ✓ 本駒酒沢合宿

縦走 △ 槍ヶ岳-七倉岳-葛温泉(10名)

槍ヶ岳-蒲田川-穂高温泉(5名)

つづら岩々登

吉田・岡垣

会員消息

松木謙三 富士銀行備後町支店より本店調査課に転勤

中村義治 埼玉県にて療養中

小林茂雄 小樽出張所(小樽市色内町八丁目)に転勤

吉田・岡垣

7月 6日 北沢小屋 山本・南
5日 盤梯山 甘利
ノ日 7月 9日 須山

越沢バットレス 吉田・吉利

編集後記

復刊以来三号まで出したわけだが、何となくマンネリズムに陥りつつあるような気がする。編集委員すらこういう気がしているんだから、配布された会報を手にされる会員の方々の中にも同様に思う人は決して二、三に止まらないと思う。かかる印象を与えることは偏に委員の責任であり執筆者の責任ではない。

毎回余り相違のない執筆者は一種の被害者であつて、原稿の集りがわるいと手近な人の好き相な会員を物色して練りに練つて書いてもらうことになる。

会報は、原稿料は出さぬ代りに全会員に門戸を解放していふのだから奮つて御投稿願いたい。これが会報に清新の息吹を与える唯一無二の方法だと思います。次号を八月に発行する二とを公約いたしますから何分の御協力をお願ひ致します。

住所録の更新も行いたいので会員各位の消息も隨時御連絡賜わりたい。

尚、針葉樹会は左記の振替口座を開設致しましたから会員へ月額最低一〇〇円、年額一二〇〇円、分割払い可)納入の際御利用下さい。

針葉樹会 振替口座 東京大一、三二九番

原稿送付先

千代田区丸ビル 七六七区

太平洋貿易(株) 気付 針葉樹会

針葉樹会報 復刊第三号

昭和三十年六月 日印刷発行

編輯 伊石 藤井 左右平
生

印刷所

東京都中央区湊町一の九
株式会社 双文社

電話築地(五)

三、六六六番